

隆寛律師の本願觀

自 見 直

隆寛教學の研究にあたりて、それが教義組織の體系的論述は中心的課題であらねばならない、と同時に一要義一要節に於いて、淨土異流各派との仔細に互る比較検討が重大なる役割をもつことに就いても、それを全體と部分の論理的關係にみるまでもなく、亦言はれねばならない。私はかうした考に於て、「觀經三心の問題は隆寛教學にあつて要義要節の一であるばかりでなく、それが全體の組織體系に於て中樞的役割を有つこと、隨ひていま考察しやうとする本願觀は三心を成立せしめる基調としての意味に於て、それが考察は不可欠なものとして要求せられる所以を思ふのである。

この小論放に於ては、私のもつ體系的研究から歸結する隆寛教義の地位——特に教義的交渉の深い西山乃至眞宗と相對して——を論ずる餘裕を惠まなかつた。たゞ本願觀を中心に隆寛教義の特色に就いて與へられたる餘白の限りに於て論及して見たいと思つた。されば特に註として附加せる中には結論のみを出して、それへの論證に不十分であり、或るものは過程の考察に留つたことに就いて、更に隆寛の金澤資料は未だテキストとしての定本がない爲、且らく「散善義問答」以外は谷大寫眞板のナンバーに據つたこと、なほ「彌陀本願義」は白文であるため私に返り點を加へたこと、又餘他の書目に於ても、不完全なる鎌倉風な返り點は悉く現行通途のそれに改めたこと、尤も訓點のみはどこまでも原本に忠實に従つたこと、且つ又恩師大須賀先生の「隆寛律師の遺著と親鸞聖人の教義」(「宗學研究」第十輯以降)に導かれるところが多い、然しこれと重複するものは可及的にそれが叙述を略したことに就いて、諸賢の諒解を得たいと念ふ。

所 化 機	能 化 主	能 居 人	所 居 土
他 自 土 機	法 人		
(2221)	(1612)	(3)	(1)
(3323)	(1713)	(4)	(2)
(3424)	(1814)	(5)	
(3525)	(1915)	(6)	
(3626)	(20)	(7)	
(3727)		(8)	
(4128)		(9)	
(4229)		(10)	
(4330)		(11)	
(4431)			
(4532)			
(4738)			
(4839)			
(40)			
(46)			

右を四分類と考ふれば、かの淨影、憬興による「義要唯三」の分類と異るとも見られる。然し彼は能居人の下に配する(3)(4)(5)の三願を成就衆生の願とも言つてゐる(『彌陀本願義』卷一)から、茲にいふ能居人、所化機とは共に衆生に約すると言つてよく、従つて憬興で言へば利衆生願に充て、矢張り彼の三分類の相承であると見るが穩當であらう。それにしても(31)(32)の如き國土莊嚴の願を自土機とすること、又(1)(2)願のみを攝する所居士とは如何等々の疑問を含むことで頗る難解の分類である。

然しかうした分類によりつゝ各願下^②に

二百一十億佛土中乃至爲本成就極樂界乃至然往三
生彼本土之行末爲易行所以法藏比丘以念佛往生爲本
願欲三十方衆生易往極樂淨土也故名超世願云々

とあるは、聖覺が「二百一十億ノ淨土ノ中ヨリスケタルコトヲエラヒテ極樂世界ヲ建立シタマエリ 乃至微妙嚴淨

ノ國土ヲマウケント願シテ」云々（唯信鈔「五」）と言へると同一筆格であつて、四十八願を攝佛土に約し、十八願に統攝するのであるから、長西が「攝法身攝淨土皆爲攝受衆生也」（散善義光明抄）と言ひ、四十八願を攝受衆生願とした——尤も攝衆生を正しく、而して廣い意味にとればそれが攝佛身、佛土たることは言ふまでもない。已に善導が四十八願攝受衆生と言つたのはこれであるが、いま長西の意趣は十八願が萬機を攝するに非ざることを伏線とする説示である——に對見して、彼が四十八願を唯だ攝佛土の願としたことは、彼の浮土教の特色を示唆するものとして意味がある。さあれ「成就極樂界」とは、第十八願酬報の土を意味することは言ふまでもなく、このことは彼が『極樂淨土宗義』に

本土者本願所成也當知本土與本願一而非二乃至非本願念佛者不可生本願土云々（中8）

と言へる本願と果上の報土、換言すれば、因願の全内容を果上の報土に見出さうとする見解と相望めねばならない。

かく言へば、已に彼が四十八願を十八願に約する領解は窺知せられるが、更に

問……四十八願皆應名本願今約念佛往生一願解本願義有何意乎

答凡就本願其有二意一者一往義也乃至二者再往義也所謂能攝義也云々（彌陀本願義「二69」）

と言へる如く一往の義に依れば四十八願は一々本願と呼ばれてよく、再往義に依れば第十八願に於て餘地四十七願を攝することを叙べ、能攝義を出してゐる。即ち『極樂淨土宗義』下に、「序分義」の彌陀本國四十八願云々を祖述して

四十八願每願以念佛往生爲本即第十八願是也指此稱名行今名増上勝因云々（49）

と言へるも亦それである。かくて、それが善導の本願觀、近くは元祖の一願該攝の如實なる傳承であることに就いては絮説するまでもない。

尤も元祖門下にありて、一願該攝を承けざるものはないが、是等の諸師は夫々解を異にして、それが本願を明白に、力強く領解せんと努力したことは注意せられねばならぬ。即ち、九品寺は且く措き、今家が三願を注意し、更に五願を開示するが如き、或ひは西山、鎮西が十八生因欣慕四十七を立てつゝ、而も四願(17、18、19、20)を注意する如き、又一念義幸西は「生因一願ノ外敢テ餘願ナシ」(玄義分抄「頁」)と淡泊明截なる本願觀を出すのは、洵に興味深いことと言はねばならぬ。

いま隆寛の本願觀を看るに、十八、十九、二十の三願の交際にありて、それが本願觀を説示してゐるといふてよい。されば私の論究も三願の検討に重點を安かねばならぬが、彼が最も力を竭した『觀經』三心釋が、本願の根本領解に於て爲されたのであるから、はじめに三心に就いて筆を進めることとする。

①「蓮門錄」長西錄に四十八願義四卷隆寛とあり、信瑞の「廣疑瑞決集」に「先師律師の本願義に」云々とあり、その内容は兩者全く同文のところもあるから、本書を隆寛作とすることが一般に認められてゐるやうである。然し金澤文庫に本寫本は二本を存し、いま一本の奥書により尊念の本願義を隆寛が講ぜられた(塚本氏の「鎌倉古鈔本解説」參觀せられたし)ことが解る。又私は本書の内容を檢察して、偶々隆寛義と見られないものがあること、例へば願名の標舉など已にそうである。されば矢張り尊念(この人物に就いては解らない)の本願義を隆寛が講説されたことが妥當なる見解であると思ふ。かく言へば本書に隆寛の思想と教義の體系を窺知し得られるとする私の見解も亦許されてよい筈である。とまれ本書は書史學的に最後の決定を見ない丈にに興味ある書と言はねばならぬ。

② 三願の願意を語る所釋の形式を「彌陀本願義」に看れば

二百一十億佛土中取_テ以_テ稱名_ニ爲_ス往生業_ノ之土_ニ爲_ス本成_ニ就極樂界_ニ是即十方衆生以_テ煩惱具足破戒重罪身業稱名往生願_ニ爲_ス增上緣_ニ欲_レ令_レ易_ニ往_ニ無漏無爲極樂淨土_ニ也——十八願——

二百一十億佛土中偏以_テ發菩提心修諸功德_ヲ有_テ爲_ス往生業_ノ之土_ニ於_テ此行者限_ニ上根利根不_レ通_ニ諸機_ニ之故上願中捨而不_レ取_ニ正覺_ニ乃_モ法藏比丘以_テ此願_ニ成_ニ就極樂界_ニ故名_ニ超世願_ニ——十九願——

二百一十億佛土中聞_ニ其佛名_ニ係_ニ心其國_ニ植_ニ諸德本_ニ有_テ爲_ス往生業_ノ之土_ニ——二十願——

とある。四十八願中十八願二十願に限りて成就極樂界の語がない。十八願は言ふまでもなく成就極樂それ自身の願であるから問はないとして、二十願に係念其國植諸德本を往生業とする土の獨立を見やうとする意趣が存するのであらうか。それは勿論邊地を示唆するものであらねばならず、而かも邊地は報土に歸するのであるから係念我國の念佛の意味が特に思はれる。かくて十九願を見れば、それは餘他の願と齊しく成就極樂界の願であり、十八願中に漏れる上根利根の發菩提心修諸功德を攝する願として二十願と簡別せられるわけである。「成就極樂界」の語に注意する形式の問題からも三願に一つの考察が暗示せられてゐると見てよいであらう。

二

隆寛には『具三心義』上下二卷があり、『觀經』の三心を極めて懇切に解説してゐる。これは『散善義問答』に見られる三心釋も同様であるが、いまその概要を描記すれば、至誠心にありて「本願眞實なるが故に之に歸する心を眞實となす」(具三心義)と言ひ「彌陀の本願を指して眞實となす」(淨土宗義)と語る如く、本願眞實に相望して「至誠眞實」を力調し、その勢は竟に「自利」「利他」「利眞實」の領解に於ても、自利眞實を「改_テ外現精進内懷虛假之行_ヲ欲_レ令_ニ三業_ニ而歸_ニ利他眞實_ニ」(具三心義)と解し、「利他願力に依りて自利眞實を成ずるを得るが故に自利眞實と曰ふ」と言ひ「自

利眞實義を成ずるを見るは、皆是れ利他眞實の力なり」と語つて、利他眞實に於て自利眞實を容認することとなり、「凡眞實心中、自利之行、一々歸_レ他力_ニ而所_レ修也（『淨土宗義』下）」と根據して「縱雖餘善、眞實心中作_レ之、可_レ無_レ其失」との領解を出すのである。かくて自利の三業はともに眞實の三業となつたのであり、これは彼の二類往生義を成立せしめる樞要として意味をもつものである。深心にあつては、「順彼佛願故」の正行と「不得外現乃至亦皆眞實」の雜行とを分別し、至誠心の眞實と虚假とに充てゝゐる。従つて「深く眞實の願を信じて永く疑心を生ぜざるを深心」（『淨土宗義』中）と言ひ、疏文による深心即ち深信之心を成じて、こゝに「約_三所信願_一名爲_三深心_一」（具三心義）と語つて、本願眞實に據つて「誠心と深心は唯だ一昧に於て二名を立てる」（具三心義）と領解した。更に廻向發願心に於ても「爲_レ水所_レ汗爲_レ火所_レ燒」ところの願往生心の「白道」を語つてゐるが、これは第十一合喩中に彌陀の願を「白道」に提撕すること、相對するもので、矢張り正雜の分別と見てよいであらう。更に廻向の三義を語る第一の廻向義に於て、至誠心の自利三業の眞實と結んで、「此廻向は此經の本意なるが故に第一に此義を擧ぐ」（散善義問答）とて、廻因向果の廻向でもなく、眞實信心中に廻向されるところの彼獨自の廻向義を成じ、第二義は「正しくは本願中の第三心」と言ひて、欲生我國に於て領解し、第三に還相廻向の義を出してゐる。

かくて彼の三心觀は要之眞實と虚假を對待して虚假を捨て、眞實につく心を本願眞實としたことにつきる。而して右の如き「至誠心結皈」の三心釋は、ひとしく三心一心を成ずる淨土異流の三心釋にありても——西山の三心觀と最もよく似てゐるとは言へ——餘程特異なる存在と云うてよい。何故ならば能歸の眞實を否定して所歸本願の眞實を以て貫くところは今家の宗祖乃至西山證空と殆ど同軌であるとしても、自利眞實の領解とその廻向義とは、正し

く彼の教義を特色つけるものと言はねばならぬ。

尤も以上は『觀經』三心に就いてであるが、彼も大體『大經』三信と『觀經』三心は「言雖異意是同」と言うて、兩者を一致と見る立場を執るのであるが、また『大經』が一向專稱の機に被らしめる三信であるに對し、『觀經』は「廻余行一向本願機」に被らしめる三心として、特に廻向發願心に上述の廻向義を語つて區別をも見てゐる。言ふまでもなくその二つの立場は本質に於て一つであつて、或は三信三心を一致と見る領解に於てのみ彼の語る廻向義が成立すると言つた方が、彼の領解を最も正しく理解することゝなるかと思料される。

かくて彼の三心釋のもつ役割は、九品に於て「念佛九品」と「三福九品」を分別して、前者を本願念佛の人とする「九品廢立」を成じ、或は諸行融會の基調に立つて、機に約して「廻心念佛」を語らしめ、更に報土邊地に約して「轉入報土」の思想を生むことゝなつた。更に又自力他力を分別して、二道、二門、二行、二念に互つて彼の教相の批判をなすのであるが、彼が常に三心に約して二力を語することは、それが行體を根據とする批判から、進んで機相に約しての批判となるのであり、換言すれば約法と約機の兩重に汎ることゝなり、まさしく機の迷執へ正しき去就を提撕するものとして意味をもつことゝなるのである。

されば、彼の三心觀は彼の教義體系の規範をなすと言はれてよく、同時にそれが本願三信に根據してゐる限りのその本願觀が彼の教義の全額であると言うても過言ではなからうと思ふ。されば進んで彼の領解する「本願の眞實」の信相の究明に入るであらう。

◇隆寛の三心觀は、その著「具三心義」上下二卷に最も詳しく說示せられてゐることは已に叙べたが、「具三心義」一部は彼の著作

中唯一の完本であり、而かもその組織が三心領解と隆寛教義の體系を有つことに於て、且は多念行儀の彼にこの著あることは全く驚異に値するとさへ言うてよい。而して是等の點に就いては拙稿「三心釋義に見られる隆寛の教義體系」(眞宗論攷) 參照せられたし。

三

金澤文庫藏、諸行本願義系の『三ヶ願事』^①に據れば、「長樂寺十八惡人念佛往生願」と出してゐる。かくの如くその筆者が特に惡人と機を規定したことは興味深いものがある。何故ならば『後世物語』に、隆寛の答としてのせる念佛往生はもとより破戒無智のものゝためなり云々

と言へる、又

いはゆる彌陀の本願はすべてもとより罪惡の凡夫のためにして、聖人賢人のためにあらずとこゝろへつれば云々とあるに一致することが注意せられるし、更に『具三心義』に「意密難知」の疏文を隨機顯益に約して

應_ル其機_ニ者罪惡生死凡夫爲_レ本蒙_ニ其益_ヲ者十惡五逆罪人爲_レ先云々

と言ひ、『極樂淨土宗義』(下50)に

彌陀不_レ成_ニ増上緣者一切凡夫豈_ニ以_ニ重惡重罪身_ヲ出_ニ穢土_ヲ入_ニ淨界_ニ哉云々

とあり、更に

廣學多聞未_ニ□□解脫_ニ有緣無緣之法凡夫難_レ知之故也愚鈍小知未必應_ニ卑下_ニ十聲一聲之力往生無_レ疑之故云々

(『具三心義』下39)

隆寛律師の本願觀(自見直)

等とあるのは、彼の本願觀が罪惡の機の自覺に出發せること、換言すれば愚鈍の凡夫こそ本願正機であることを解信したと謂はれてよく、更に『彌陀本願義』の十九願下に

限、上根利根、不諸機、之故捨而不取正覺

と語るのは、同じく十八願下に

十方衆生以煩惱具足破戒重罪身業稱名

とあるに對見せられて、こゝにも十八願の正機を十九願機と差別した彼の領解が明徴である。もとよりそれが本願の「唯除五逆」の文に着目し、且つ深心釋の機の深信に根據したであらうことは、彼が「彌陀本願義」に五逆と謗法との抑止が「觀經」にありて攝取救濟せられることを、善導の「未造」「已造」の提撕を引きて仔細に論じ、「攝廻向本願力也」と結し、更に「造惡を嫌ふは抑止門のこゝろ」とし「罪惡も廻向すること」に依て、即ち本願力に於て攝取せられると見るところに徴して明らかである。尙九品の下下品に於て如何に領解したかに就いて見るべきものがないから、特に明瞭に言へないが、こゝに彼の信仰意識としての特色が窺はれると言うてよいであらう。

かくて『論註』の淨摩尼珠の譬を引き

深仰彌陀名號寶珠功用是其他力本意也（『本願義』92）

と言へる如く、願力を名號に仰ぎて稱佛名の功用を讃へるのであり、其處に十七願に「爲勸進濁世迷徒也」と言ふところの咨嗟の意味を見るのではなかつたらうか。先に注意せる如く、三心に於ける至誠心の眞實三業と結んで、至誠念佛、即ち彼の謂ふ「眞實心中稱名行」を成じて、

歸^{スル}入利他願^ニ之心此其解也 從^レ此心所起^ニ三業善此其行也

と言ひ、こゝに彼の起行を良とせる「行」思想を生むのである。更に

眞實心者歸^ニ利他眞實願^ニ之心也皈^ニ利他願^ニ者蓋稱^ニ彼佛名^ニ也(20左)

と言ひ、又

眞實心者歸^ニ本願^ニ之心也歸^ニ本願^ニ者即稱^ニ佛名^ニ也是以深心中以^ニ稱名^ニ爲^ニ正中之正^ニ云々(24左)

と言ふに至れば、その起行の相が彌々明瞭である。かくて

翻^ニ內三心^ニ施^ニ外儀^ニ爲^ニ名號^ニ翻^ニ外稱名^ニ播^ニ內云^ニ三心安心之三心起行稱名一而非^ニ一乃至心行一躰故云々

と言ひ、或は『極樂淨土宗義』に

本願者稱名々々即三心也當知稱名與^ニ三心^ニ同非^ニ異^ニ(中8)

と言へる如く三心が至誠心に歸し、自利三業として起行へ旅立つところの過程をとるのである。もとよりそれが行信不二の立場に於て理解せられたことに於ては、何人も異論はないが、「小用功勞」の解釋に「一念十念乃至一形稱名也」と言ひ、「願行既成」を「指稱名行」(38)と言へることは——かくて彼の滅罪思想へ發展するのであつて——その起行への發展過程に彼らしき特色の存するのは否定出来ない。

①金澤文庫藏で鎌倉末期の寫本といはれてゐる。當時勢力のあつた四流の三願觀を出し、九品寺流の立場に於て批判したものであるから、三願觀の考察には頗る貴重資料である。本文は佛專惠谷教授によつて紹介せられてゐる(元祖門下異義辨假題)——然阿良忠傳の新研究附録)が、まゝ、讀みちがへがあるやうである。

②往生の正因としての名號が、名號力として難思の密用をもつことから、進んでそれを稱念し——前三後一をえらぶ正定業は

隆寛律師の本願觀(自見直)

大谷學報 第十七卷 第三號

一四四

口業である——聲に出すところに滅罪の機能を仰ぐのであつた。

彼が「彌陀本願義」第一に

彌陀名號中備無量無邊不可思議功德故、一念能消滅億劫重罪、一念能具足無上功德、一念能獲廣大利益（第九願下）

と言ふのが彼の思想根據である。かくて「閑亭後世」に

「隆寛律師云く、三界の内には、非想の八萬劫に過ぎて乃至生死にかへらずといふ文なれば、一念に既に未來生死に流轉すべき罪滅しぬ。是正しく極樂に生るべきことを、八十億劫の罪滅すと也（下51頁）と言ひ、或ひは但馬宮へ答へる中に

「罪業ノカサナラムニツケテモ彌陀ノ願力ニテハラヒノソイテ名號ノ功力ニテキエウセンソト云々」（「明義進行集」24頁）とあり、「極樂淨土宗義」に

念々聲々或滅五十億劫重罪、或滅八十億劫重罪、是即願力不思議也爲信、知此佛恩、無始已來十惡五逆謗法等及一切之間三業六情所犯惡業云々（下56）

と言へる如き滅罪思想を見ることが出来る。尙、以上に於てそれが一念滅罪であることがわかる。更に「滅罪劫數義」にも竊案「道理依一念信得往生、無始已來生死之罪一時滅盡」

と言ひ、その劫數の義を明して

更雖不可定劫取、隨事辨數之時取百劫千劫乃至取塵點劫不可相違矣

と語り、八十億劫についても隨分と論じてゐるが、已に滅罪劫數なる書名よりしても彼の思想の全部が滅罪の思想であつた

とさへ言はれてよいと思ふ。因みに

「凡一念滅無量罪、見文決定有其功用、故爲令生行者信心、然說也實得滅者日々時々念佛人煩惱不止、濁心不止乎不預此現證、不辨道理、已滅罪了既乘本願云者不便々々雖不乘本願、尙等乘發眞實心、歸入他力、故雖未滅罪障、既如滅稱、他力滅罪名號、無疑無慮故云々（滅罪劫數義）」

とあるに見れば、結局煩惱止まず濁心止まない現實生活を肯定して而かも一念滅罪を貰いてゐる。而してその一念は平生の

一念でなく臨終の一念とするのであるから（平生の一念に本願に乗ずる人を認めてはゐる）矢張り、どこまでも稱へることに滅罪の意味を見たであらうことは思はれるが、進んで戒律と念佛——念佛に戒はそなはる——又念佛には懺悔を用ひない（『極樂宗義』中）と言つたことよりしても、彼が念々聲々に滅罪を仰いだ生活がわかるやうである。

四

上來、十八願に於ける信相を考察したから、進んで彼の本願釋を檢討するであらう。已に言及せる如く、隆寛の本願觀は元祖の如實なる傳承であつた。即ち『彌陀本願義』に
何故簡_ニ捨_ニ甚深最上諸行_ニ選_ニ擇散心_ニ麁動稱名行_ニ爲_ニ本願_ニ耶
と徵問し、答へて

89)

念佛易行故廣通_ニ諸機_ニ餘妙行難_ニ修故隔_ニ下根類_ニ今欲_ニ令_ニ一切衆生而平等往生_ニ故捨_レ難取_レ易爲_ニ本願_ニ也（十八願下とあり、各願下に

然往_ニ生彼本土_ニ之行末_ニ爲_ニ易行_ニ是故法藏比丘以_ニ念佛往生_ニ爲_ニ本願_ニ欲_ニ令_ニ十方衆生易_ニ往_ニ極樂淨土_ニ也故名_ニ超世願_ニ

と言へるは、元祖の選擇攝取に於ける難易に約するの相承である。

されば彼が二行の得失に就いても

選擇集對_ニ純立_ニ雜謹案_ニ此義_ニ雜行即雜善_ニ云自餘諸善悉名_ニ雜行_ニ又指_ニ此雜行_ニ亦名_ニ雜修_ニ亦名_ニ雜行_ニ文云若捨_レ專

隆寛律師の本願觀（自見直）

修難行^ヲ又云修難^テ不至^ル心者千中無^レ一此二行得失如^ニ前已辨^ニ云々 (具三心義「下33」)

とありて、元祖の玄旨を祖述してゐるのが見られる。されば且らくそれが正行の本質の領解を窺ふために、視角を轉じて、彼の一念多念批判の根據を一瞥することゝする。從來彼が『一念多念分別事』に於て、所謂「一多」の批判をなしてゐるが、その規範たる本願觀が、善導、元祖の本願釋即ち「行々相對」の見解を出でないことが注意せられてゐることを想起せねばならぬ。彼が「念、佛、行、ニツキテ一念多念ノアラソヒ」云々といへるは、果して行の一多批判を出でないであつたらうかと言ふことである。尤もこれに對して已に了祥師、大儼德海師の如きは對立的見解を舒べてゐるが、孰れにせよその解決の鍵を握る彼の本願釋は、いま一步檢討を深めることが要求せられる。

かくて『彌陀本願義』に據れば

超世願者正指^ニ一念^ニ所以乃至諸餘如來不^レ發^ニ一念往生願^ニ故謂^ニ超世願^ニ乃至又彼自^レ力^ニ念^ニ此他^ニ力^ニ念^ニ也(90十八願下)

と出して、他力の一念を基調とする超世願を語り、更に

自^ニ無^ニ惡趣^ニ至^ニ于得^ニ三法忍^ニ所^ニ選擇^ニ佛國等往生之行皆不^ニ容易^ニ是故超^ニ過彼諸佛^ニ發^ニ稱名易往願^ニ是以經下願成就^ニ云

とあるは、四十八願の至極を十八願成就の一念に見るのであつて、これは彼が因願の乃至を從少至多、從多至少の兩義に於て領解し、而かも

從多至少義 本願義故 (散善義問答)

と言つた如く、むしろ從多至少に本願の意趣ありと領解するの本由であるから、寔に徹底せる本願觀であると言ふてよい。更にこの意趣は『本願義』に次の如く闡明に出されてゐる。

問本願文中云「乃至十念」願成就文云「乃至一念」不審彌陀超世願意爲「十念」爲「一念」

答諸師名「十念往生願」上除「一形」下除「一念」又不「願」願成就文「也」善導意名「念佛往生願」上攝「一形」下攝「一念」所詮者信者稱名功カ若多若少必得往生是其本願意也但超世願者正指「一念」云々(89)

右の如きは、善導に依る「上盡一形下至一念」の提擧は、信に立脚してのみ言へること、かくてこそ稱名の邊數を論じないてふ論理が成立することを語るのであつた。已にかうした行信不二義を基調とするから、『大經』易往而無人を釋して、「易往」を行に「無人」を信に約して難信を語る(『彌陀本願義』下七願下)「明義進行集」所引「但馬宮へ答へる三ヶ條」(2頁)ことともなるのであつた。隨ひて彼の從來に於ける一念多念批判が「行の一念多念論」を出でずとするも、又『滅罪劫數義』に於ける一多融即の論が、動もすれば得意の天台教理を弄ぶ概念の遊戲と見られる恐れがないでないが、その根底には「信」に立脚せる切實なる一多の批判があつたことを識らねばならぬ。即ち彼の行儀が「多念の行者」と見らるべきであつても、正しく「一念多念分別事」に見て彼は電光朝露泡沫の思想に生きた人であるから、縦ひ一步をゆづつて、彼の一念が口稱の一念であり、多念と言へるが二聲三聲乃至一形の稱名行であつたとしても、それは一念を不足とする十念でなく『閑亭後世物語』に言ふところの「すゞろに稱へられた」のであり「あかぬうれしさ」の稱名であつたと言ふべきであらう。さればこそ『具三心義』に

稱^ニ名號^ヲ者歸^ニ本願^ニ故稱^{スルコト}ニ 名號^ニ者不^レ疑^ニ本願^ヲ故稱^{ナリ}ニ名號^者被^レ催^{ルカ}欲生^心故也定知^{メテス}一稱名號之聲^{ノニ}中三心具足^{シテ}無^レ有^ニ闕減^ニ云々

と言ふところの本願と名號、名號と稱名乃至三心との本質的領解が理解せられるのである。已にかゝる行信不二の立場が理解せられたる上は、彼の「一念多念論」に一つの決定を與へたと言うてよいであらう。

次に三心に於ける彼の領解は先に言及せる如く、『觀經』の三心にありて本願の三信を理解してゐる。それは『具三心義』に「其言雖異其意是同」と言へる如くであるが、いま『彌陀本願義』十八願釋には、

問稱名念佛具^ニ三心^ニ否

答必可^レ具^ニ如實修行相應^ニ三心^ニ也

と、『論註』所説の淳心、一心、相續心を深心、決定心、相續心の名に於て出してゐることは、如何に考へたらよいであらうか。これに就いて彼が『大』『觀』二經の三心について

觀經三心就^ニ散善門^ニ所明也不可^レ關^ニ弘願稱名行者^ニ古今諸師似^レ存^ニ其心^ニ但必具^ニ觀經三心^ニ之義必然也(98)

とも出してゐることに注意せねばならぬ。先きに『具三心義』に「言異意同」といひ、今兩者を區別して考へるのは、或は『大經』の三信に『觀經』三心を必ず具足するとは言つてゐるが、聊か矛盾である。尤も「具三心義」に「大經」の欲生我國とは發願であるが廻向に非ずとの難に答へて、

大經又有^ニ廻向發願^ニ也發願者如^レ問 廻向者欲生我國之文豈非^ニ廻^テ心^ニ向^ニ西耶^ニ云々

といひ、更に

本願被^レ一向稱名機故云欲生我國今經兼下廻餘行向本願機故云廻向云々

と言つて、機の差別に於て第三心に差別を見てゐるから、これはいま『本願義』に「觀經三心就散善門所明也不可關弘願稱名行者」と言ふに一致するわけであり、かくて再び『論註』の如實修行の三心を考へて見ても、彼が「至誠心釋」に於ける疏文の「欲下廻此雜毒之行求生彼佛淨土者」云々を領解して「明下廻自力行難得往生」と言ひ、これを『論註』の

不如實修行與名義不相應故

といひ、又

不如實修行者不稱利他眞實名號也與名義不相應者違利他眞實名願故也（具三心義上15）

とあるに想ひ併せて言へば、それが『觀經』三心に區別する爲に『論註』の三心を出して、それが機相に於て展轉する一心を語つて、『觀經』三心が必ずしも展轉相成を語らないことと區別するのであらうか。然しこれ等は猶文證の徴すべきものがないから明瞭でない。何にせよ、三不三信を出したことは、異流に於ても特異とせられねばならず、尙十分の検討を要する。而して『彌陀本願義』の書史學的考察と關聯をもつが、果して此等が隆寛の所説であつたか、どうか、等の疑問も生起するのであるが、いまは後日の検討に委ねる。

さあれ隆寛の本願釋は、三信十念何れにも偏執することなく、『極樂淨土宗義』に

本願者稱名々々者即三心也當知稱名與三心同非異然則指三念爲三聲者隨願也（中8）

と言へる如き、心行圓滿せる念佛義を成ずるところの融通無碍なる義相をもつものであつた。いま念聲は一の根據

を「願に隨ふ」と言へる如く、よく願の玄意に於て願を領解したと言ふか、かうしたところに彼の思想と教義乃至教義と生活がよく他力に於て一貫せられてゐると言うてよいものがある。

以上が隆寛の本願觀即ち第十八願觀の大體であるが、抑も第十八願を念佛往生願又は生因の願として考ふことは、降つて時宗一遍の領解は多分に相違するが、元祖門下に於て異義のないところである。即ち鎮西、西山はもとより、九品寺も第十八願に就いては見解を一にしてゐる。従つて先に出せる『三ヶ願事』にあつても、長樂寺が惡人念佛往生願と、その機を限つたことを非難するに止まつてゐる。然してその惡人と言へることが隆寛義にありて何等機を規定するのではなく、切實に願意に味到した言であつたことは、上來の考察にありて明徴であらう。

而して、十八願領解の實際は、むしろ十九、二十兩願を如何に取扱ふかに於て決定せらるべきであるから、いま一往こゝに十八願の考察を止める。

①本派興隆師は「一念多念分別事開持記」に「今此一念多念分別事ハソノ本願章ニ開顯シ給フ處ノ選擇本願ヲ開詮シ給ハン爲ナレバ是亦行ヲ以テ本願ヲ立テタマフナリ」(眞全⁴¹頁)と言つてゐる。またこの立場をとる人に開悟院師もある。而して是等主張の根據は「一念多念分別事」と「一念多念證文」との交際にありて、引證文に出沒、具略の存することにゐるのであるが、それに就いては「一多分別事」の如き粗朴なる書を完成せる今家の宗學より批判した爲でないかとの辯護も成立し得るわけであるが、此等は猶研究の餘地があると思はれる。

②了祥師は夙に隆寛教學の研究に力を盡した先哲であるが、常に宗祖と同一信仰の人として取扱つてゐる。一例を挙げると、「後世物語錄」に「閑亭後世」の處々に往生の正因は信心なり、その信相續させんための稱名じやとある。又「滅罪」にも信心は因、稱名は緣とあり、爾れば隆寛のすばり、成程多念の稱名はすゝむれど信が大事といふこと決定と見へる。元祖の銘文にも信珠在心疑雲永晴佛光圓頂とあるなり云々(眞全⁴⁵頁)と言つてゐる。

大儼德海師は、「一念多念分別事願仰錄」(住田先生藏)に「一念無上ノ功德ヲタノミ一念廣大ノ利益ヲアフクユヘナリ」とある。「一念ノ功德」の一念は信の一念であることを注意してゐる。

五

茲に言ふまでもなく、十九願の對機は發菩提心修諸功德の人である。これは二十願が係念我國植諸德本を對機とせると共に、即ち三願がひとしく十方衆生と呼びかけ乍ら、それを機に於て差別する見解の生起するところである。然して元祖門下にありて三願を特に機に於て注意したのは、蓋し今家の宗祖と、いまの隆寛二師よりないのでないか。即ち『極樂淨土宗義』(中3)に

問含佛往生機有幾差別乎答案大經心有三種別所謂十八十九二十願是其證也

とあるが這の間の消息を示唆し、また已に、信瑞が『廣疑瑞決集』に先師律師の『本願義』に言ふとて、

凡三種往生願約機約法雖有不同正遂往生正蒙來迎之時乃至願往生機其數雖多略而謂之不出三種故發此三願(瑞決集5頁)

と言へるに見ても明らかである。これは『彌陀本願義』に全同の文を出してゐるが、斯くの如く機に約して十九、二十願を語り、『本願義』に據れば十九願に雜行雜修と言ひ、二十願に雜修諸行云々と言つて、諸行本願を語らない點は注目せらるべきである。

いま隆寛にありては、その發菩提心修諸功德は、三輩の機を示唆するのであり、願意に立つて言へばそれは「衆生根性千差萬品云々」又衆生根機不一准に應ずる「佛意廣大」の誓意であつた。然し「以餘行餘業不爲往生正因」

と結論せる如く、それは竟には認容せられる「本善」ではあるが、そのまゝにては尙賤しめらるべきものであり、かくてこゝに廻向の義が出だされるのである。されば『彌陀本願義』(94)に

發菩提心修諸功德雖非本願意歸向彌陀之後既成念佛人故

といふが如く、「彌陀に歸向」することが要せられる。このことを或は

當知第十八願雖限專稱名號之行佛意猶廣大假令初修餘行後廻向我願必垂來迎然則一向專念無量壽佛以後與第十八願不異也

と領解してゐる。換言すれば本善を廻向に於て念佛の機となさしめ生かすことであつた。これを三心に約して言へば

以三心具不具分雖爲一發三心後兩願體一也(具三心義上7)

と領解する如くである。

かく言へば、長西一派が念佛、諸行の兩機の來迎と解するにも異り、乃至西山が「來迎者願力酬因形」と言ふ「來迎」又鎮西が主として念佛、傍ら諸行の來迎と領解し「現其人前者」の文字に捉はれてゐるのと遠い。即ち已に考察せる如く餘行餘業の人として「廻心發願せしめ」「歸向せしめる」のである。換言すれば、先に指摘せる如く自利眞實の三業に利他眞實より發す三業の善を認容すると、同一根據にたつもので、三心具足せしめることに於て、諸行を融會したのであつて、十九願の機は十八願の眞實に根據してのみ、存在の意味があり救済の成立があると領解するのである。這般の消息を『淨土宗義』には

就十九願^ニ有^二三種^一義^一、一者歸^二他力^一、捨^二餘行^一、此人同^ス十八願^ニ機^一、二者發^テ三心^一、後猶論^ス餘善^一、既發^ニ三心^一、故雖論^ニ餘行^一、異^ニ邊地機^一、(中々)

と語つてゐるが、これで見ると齊しく三心を發し、他力に歸し乍ら念佛の機に移るものと、尙諸行に止まるものと、二類のあることを語るのではなからうか。而して『廣疑瑞決集』八頁に隆寛の言として

隆寛こそ十九願の機よ、其故は本と圓宗の菩提心を發して、聖道の出離を期せしほどに、末法に生をうけたる云々の語を想起するに、それが獲信後に於ける求道の歷程を回顧しての告白として、今家の宗祖の三願轉入の告白と如何に關聯するかは別の問題として、かく言ふ隆寛の十九願機は二種の義に於ける前者であらねばならず、即ち果上に約して言へば、具三心して報土生となるべきの類であつて、尙本善を執じて邊地に止まるの類と區別せられる。かくの如き二類の考察は二十願に於ても同様に言はれることであるが、後に考察する如く二十願は單諸行でなく六念の念佛位であつたから、矢張り兩者は區別せられねばならない。

◇隆寛が十九願に於て直ちに具三心する機(念佛の機)を出すことは單諸行とせず、修諸功德に一分念佛をもたしめたのであらうか。先に言へる如く諸行本願義系では、十九願の體は來迎であり、その所由として念佛と諸行を擧げてゐる。即ち「三ヶ願事」によれば「十九念佛諸行來迎、願」といひ、或ひは「合十八二十行本^ヲ爲^ス諸來迎^ヲ」云々發菩提心修諸功德^ニ云々と言つてゐる。鎮西で見れば、十九願の願事は矢張り來迎である(『西宗要』淨全十^二頁^一)、而かも彼の派で諸行非本願の理を語るために四由を擧げてゐるのであるが、二類往生義であるから主として念佛傍らに諸行の來迎(『東宗要』淨全十一^二頁^一)としてゐる。而していま長西、鎮西では十九願の願事(願體)は來迎として、それが念佛、諸行兩者に通ずるといふのであるから、隆寛とは全く別ではあるが、先に言へる如く隆寛に於ても、修諸功德が單に諸行でなく、一分念佛に通ずる微意が窺はれるとすんならば、長西、鎮西の解釋の上に立つて、而も今家等に近い領解への傾向をとり入れたのではなからうか。

因みに、靜照の「四十八願釋」で見れば、雖「開稱名」云々とあつて、修諸功德を稱名と見てゐる（續淨全「十七頁」）ことが指摘せられる。然しいま直接そうした兩者の關係等に考察すべき資料を恵まれない。

◇隆寛の教をうけたと言はれる淨遍僧部の「別異弘願性惡鈔」（金澤文庫本）によれば、「百即百生」本願一行稱名正行「百一二助行兼行人」「千中無一」惡難行兼化人の三類に一切往生人を分別し、更に念佛宿善機と一向惡行機の二を加へて五類別してゐる。而して前の三類は正雜の分別はないが念佛人であるとしてゐる。いま十九願の機を何れに配屬せしむるかと言へば、念佛宿善機とも思はれず、まして一向惡行の機でないから、矢張り百一二の助行人が千中無一の惡難行兼化の念佛人であるとせねばならぬ。こうした逆の考察は許されないであらうか。

◇私は隆寛の二十願は係念我國を至心廻向に據るが故に已に念佛に通ずると言ひ、十九願の機は單諸行と解釋して來たが、右の如く考察すれば修諸功德も亦結局念佛をもつこととなるから、又こゝに且らく疑問をさしはさまねばならない。

之を要するに十九願の機とは、本善を廻して本願念佛の人に同ずる人である。屢々引くところの『三ヶ願事』に「十九本正道廻心念佛願」と言つてゐるのは、よく彼の領解を得てゐると謂うてよい。然しこの書の次下に善導が「各發無上心」又「同發菩提心」と言へばとて、これが聖道門と解せられるかとの難破をなしてゐるが、これは隆寛が菩提心に就いて聖道と淨土の分別あるを知らないもので、この難は當つてゐない。^①

以上の如き十九願の領解は、その根據を廻向の第一釋におくのであつて、即ち

第一廻向義約ニ觀經三福人約ニ大經十九二十兩願ニ可論云々（散善義問答「廻向發願心下」）

と言へる如くであり、かくて諸行の機に誘引に成功するのであるが、尙これ等は次に二十願の考察と俟つて、更に究明せられねばならぬ。

①「極樂淨土宗義」中13によれば

於_ニ聖道_ノ菩提心_ニ者此宗所_レ不_レ論也其故者自力修行人者必發_ニ菩提心_ニ他力往生人者唯發_ニ三心_ニ願_ニ本願_ニ故也

とあつて、菩提心と三心を判然と區別してゐる。即ちかく言ふ時の菩提心は具三心以前の菩提心であるから、聖道の菩提心と見たのであらう。然し又つゞいて、「同發菩提心」に就いて

但同發菩提心釋者會_レ之有_ニ二義_ニ一者以_ニ往生極樂人_ニ例_ニ同發菩提心_ニ人_ニ其義思而應_レ知二者攝_ニ衆生_ニ令_ニ生_ニ有佛國土_ニ以_ニ之_ニ名爲_ニ菩提心_ニ之義_ニ也

とあるは、三心に融會せられる菩提心（一義）と、通淨土の菩提心を語つて（第二義）をり、聖道の菩提心と簡別してゐるのである。

六

隆寛に於ける十九願領解を願それ自體の所明のうちに窮明しようとして來たのであるが、次いで『善善義問答』十一門料簡の後に

問慈心不殺大乘等行偏爲_ニ往生極樂_ニ修_レ之_ニ歟

答有_ニ二義_ニ一爲_ニ往生極樂_ニ修_レ之_ニ二爲_ニ隨緣得道_ニ修_レ之_ニ云々

と言へる問答に注意しなければならぬ。右は上品上生に於ける復有三種衆生の三福行を如何に考ふべきかに就いての間であること、茲に贅語するに當らないが、已に中品上生下の所明中に「三福非_ニ往生直因_ニ」云々と明截に出されるのに、いまは二義を出し（一）爲_ニ往生極樂_ニ（二）爲_ニ隨緣得道_ニと言つてゐるのは何を語らうとするのであるか。殊にそれが前者に二十願を後者に十九願意を規範とすることを指摘してゐるから、いま兩願の考察にあたつて特にこれを看過し難いものがある。即ち長きを煩はず左に出す所以である。

隆寛律師の本願觀（自見直）

初爲^ニ往生[、]修[、]餘行[、]此人[、]以[、]第二十願爲[、]手本[、]此中又有^ニ類[、]一者聞^ニ彌陀名號[、]心雖懸^ニ西方[、]未^レ發^ニ眞實心[、]故
自力稱名甚弱思植^ニ諸德本[、]也此豈非^ニ讀誦大乘修行六念等[、]乎然此人忽^ニ以廻心歸^ニ彌陀[、]發^ニ三心[、]之時決定得^ニ往生[、]
也以^ニ此人[、]隨^ニ本善[、]爲^ニ往生[、]修^ニ餘行[、]言此人不可廻心之前[、]空疲^ニ自行[、]徒積^ニ餘善[、]難^レ遂^ニ往生[、]望^ニ難^レ成^ニ往生[、]思^ニ
二者執^ニ餘善自力業[、]以^ニ此力[、]欲得^ニ往生[、]然而閑案^ニ因果之道理[、]自力尙弱[、]思^ニ以^ニ此等業[、]廻^ニ向彌陀[、]彌陀必納^ニ受
我行業[、]必垂^ニ來迎[、]引接[、]非^ニ佛力[、]難^レ得^ニ往生[、]思人^ニ是也

次爲^ニ成^ニ隨緣果[、]修^ニ慈心持戒等功德[、]者即以^ニ第十九願[、]爲^ニ手本[、]此人發^ニ大菩提心[、]爲^ニ成^ニ佛道[、]修^ニ六度萬行[、]此忽
歸^ニ彌陀願[、]發^ニ三心[、]之時蒙^ニ迎接[、]得^ニ往生[、]也乃至次此兩機人中尙執^ニ本善願[、]往生[、]彌陀感^ニ此志[、]必言垂^ニ來迎[、]□
也指^ニ此人[、]名^ニ帶惑疑生者[、]約^ニ此人[、]辨^ニ九品邊地往生[、]也 (散善義問答「上品上生下」)

上來屢々引くところの『三ヶ願事』に長樂寺の十九願は「本正(聖)道廻心念佛願」とあること、又「隆寛こそ十九願
の機……聖道の出離を期せし程に云々」と言へる告白は已に指摘したのであるが、いま隨縁の得道と言つて、往
生極樂のためとする二十願の機と差別したことの根據は何處にあるのであらうか甚だ明瞭でない。もと三輩九品開
合の玄旨^①によつて九品は十九、二十兩願に約されて彼の二類の教義體系をなしてゐるから、十九願二十願の分齊を
考察して且らく九品のうち特に十九願に約する機を規定することに論及したい。

隆寛の九品領解を一瞥するに、十一門分科の玄旨による念佛九品と教門の施設としての三福九品の二つの見方が
ある。而して後者に立脚して、九品に本善を認容する。彼がつねに「九品階位就^ニ本所修善所[、]分別^ニ也[、]」と言ふのは
この消息を語るのであるが、かくてその本善を有つものは上品三生と中品上中二生に限るのであり、已に中品下生

は

無_二出_レ世_レ善_二無_二廻_レ向_一言_二今_レ舉_二世_レ善_二非_レ爲_二廻_レ向_一只_レ爲_二定_二品_レ位_一乎云々

と言へる如く、世善の故に下品三生と範疇を同ぜしめられ、一往別の取扱をうけるのであつた。

上品三生人に就いて、

上品三生人不_レ廻_二入_レ念佛_一尙_レ執_二本_レ善_一望_二來_レ迎_一此人以_二自_レ力_一難_レ得_二往_レ生_一故專歸_二來_レ迎_レ願_一一心祈_二臨_レ終_一迎接_二依_二此_一心勇猛_二乘_二來_レ迎_レ蓮_一此以_二自_レ力_一非_レ出_二三_レ界_一只以_二本_レ善_一廻_二彌_レ陀_一依_二佛_レ力_一得_二往_レ生_一也已_二出_二三_レ界_一入_二西_レ土_一

と言へるは、先に『淨土宗義』に十九願に二種義を語る内の

二者發_二三_レ心_一後猶論_二餘_レ善_一既發_二三_レ心_一故雖論_二餘_レ行_一異_二邊_レ地_一機_二云々

と言へると同一意趣を語つてをり、上中生に

云_二就_レ行_レ差_レ別_一分_二三_レ品_一是其證也以_レ之_レ謂_二之_一垂_二上_レ品_一中_レ生_一來_レ迎_二之_一時坐_二衆_レ讚_レ競_二本_レ善_一尤_レ道_レ理_レ執_二本_レ善_一望_二來_レ迎_一之_レ人_一故

とあり、或は

此中生人執_二本_レ善_一力_二望_二來_レ迎_一故未_レ發_二眞_レ實_一心_一不_レ發_二眞_レ實_一心_一是疑_二本_レ願_一他_レ力_一人是故任_二行_レ人_一情_一讚_二歎_レ本_レ善_一之時此人只以_二本_レ善_一力_二預_レ來_レ迎_一執_二故_一云々

とあり、中品上生下に（上品下生下に脱落）

廻_二向_レ發_レ願_一三_レ心具_二足_レ人_一依_二本_レ願_一他_レ力_一往_二生_レ本_レ願_一土_一全_レ非_二中_レ品_一上_レ生_レ人_一也今蒙_二此_レ品_一來_レ迎_二人_一依_二自_レ力_一執_二生_レ邊_レ地_一乃至彌

陀以^ニ大悲力^ヲ暫置^ニ邊地^ニ誘令^レ歸^ニ入本願^ニ故也

とあり、中^ニ生^ニ下^ニに

凡^ニ中品中生人者執^ニ小戒力^ニ以^ニ此業力^ニ望^ニ彌陀來迎^ニ是人新儲^ニ中品中生地^ニ於^レ此^ニ任^ニ此執^ニ證果^ニ云々

とあるは、自力心を改め、具三心して他力を歸するに非ずして、どこまでも本善を執するのであるから、彌陀の方より「任^ニ行人情^ニ」て邊地生を得せしめることを語つてをり、これは上品中生以下同じ筆格であつて、先きに「往生極樂」隨緣得道の二機のうち、

此^レ兩機人中尙執^ニ本善願^ニ往生^{セシト}彌陀感^ニ此志^ニ必云^レ垂^ニ來迎^ニ□也

と言ふ『執本善』の取扱と一致する。以上の論證よりして、上品中生、上品下生、中品上生、中品中生の四生を十九願の機を規定してよいと思ふのである。（「散善義問答」は下品三生の下を缺く）

次に下品三人に就いて、『極樂淨土宗義』に

就^ニ稱名行^ニ有^ニ三類^ニ一者三心具足稱名此人必生^ニ本願土^ニ二者六念中念佛此人不^レ發^ニ三心^ニ故得^ニ生^ニ邊地^ニ所謂下品

三人是也（「宗義」中19）

とありて、下三品に六念の念佛をあてゝゐる。

先に下品三生は廻向すべき本善のないことを指摘したが、特に下品下生に就いて

此人若臨終遇^ニ善知識^ニ廻心得^ニ往生^ニ也乃至下品下生人寧非^ニ此類^ニ乎云々

とあり、廻惡向善の廻心の義を出してゐる。尤も九品は念佛九品に約せられるのであるが右は受法の不同として修

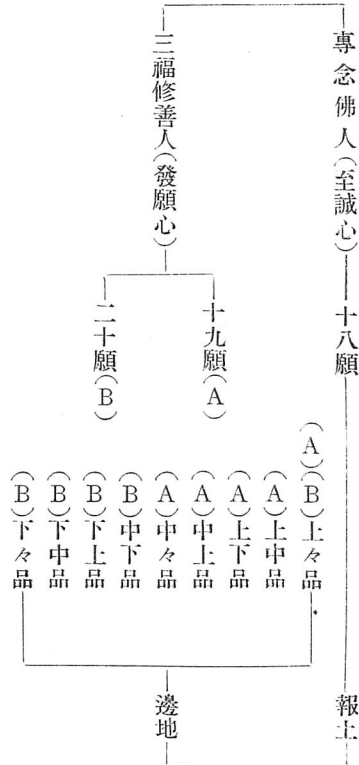
行六念を出して邊地の得生を許したのは注意せられねばならない。尙先に上品上生の考察を保留したのであるが、此人上々根機、故其德甚多故到即悟無生同本念佛人入本願所成土也

と言へる所明は、本善の高きが故に、直ちに本念佛人に同じて報土生を得る如くであるが、已に到、即の二字あるにてそれは邊地生であることは解る。而かも本善の中には修行六念があるのであるから、むしろ下品三生人乃至中品下生人と同範疇に入れらるべきであると言うてよい。従つて上上生は十九願と二十願に繋屬せられることゝなる。後に考察する如く二十願の聞名係念は六念の念佛と領解せられるのであるから、私は上上、中下、下三の五生を以て二十願の機に充てたいと思ふ。然しこれ等は次に正しく二十願の領解に於て更に検討せられねばならぬ。

隆寛にあつて、九品が如何に領解せられたかは頗る難澁で、こゝに仔細に論ぜられることは不可能である。隆寛面授の資である覺終が『定善義問答私見聞』（金澤文庫本）に

散善經ニ九品ニ或文或理隱顯不定易迷難解云々

と言つてゐるのは、恐らく隆寛の「念佛九品」を隱彰とし「三福九品」を顯意に解したのであらうが、以上の如き三願との交際の如き、蓋し彼等門弟に於ても餘程難解とせられたことを語つてゐるのなからうか。され従來『源流章』等に九品はこれ邊地生と紹介せられて來た彼の九品論は頗る複雑であることが知られる。私も上來考察するところ論證の過程に説明が足らず、尙古い淨土宗の章疏を参照してゐないから檢察の餘地存することを思ふのであるが、一往以上の消息を圖科して、次に二十願の考察に入ることゝする。



①二類の機に於ける三福修善人とは十九願二十願の所攝とすること已に知れる如くであるが、「彌陀本願義」(94)に發菩提心修諸功德雖「非本願意」至經願成就文云として三輩の文を出してゐる。即ち十九願成就として三輩を出してなり、かくて觀經九品を大經の胎生と相望して三輩九品に邊地生をみることに蓋し元祖門下において今家と隆寛にのみ見られる黒谷の玄旨であると言つてよい。

覺終の「定善義問答私見聞」に

大經觀經共說彌陀本願、同明西方教行、是以三輩與九品元是開合異也、依之選擇云三輩九品開合異、而後學可迷二種一同意、故下八品蓮花未開之時、即是大經所說之疑惑往生者、蓮花未開之時、譬胎生爲顯不異義云々

とある。因みに右に依れば觀經九品のうち下八品を指摘してゐることは、「源流章」が覺終と同門の關係にある敬日の九品頌解を擧げて

九品之中上品上生是報淨土、自下八品並是邊地(卅四)

と語ると一致してなり興味がある。尙さきに指摘せる如く、隆寛に上上品を特別に取扱ふ微意あることを併せ考ふれば、「源

流章」に、敬日を目して「此等義略違本師承」と言つてゐることは考へ直さればならぬこととなる。

七

かくて二十願文を見るに聞名係念植諸徳本の機である。『三ヶ願事』には本雜行廻心念佛願と紹介してゐる。『彌陀本願義』に係念定生願の願名を出してゐるに比見すれば、「本雜行廻心念佛」の願といふのが隆寛の領解にふさはしい。係念定生の願名は、靜照の『阿彌陀如來四十八願釋』に出すところであり、近くは鎮西が又そうであつて、鎮西はこれに遠生の義をもたしめてゐるのである。而るに隆寛には遠生の義はなく、寧ろどこまでも順次生である。されば隆寛が鎮西に對立してゐる以上特に係念定生願と呼稱したとは考へられないのである。このことは『彌陀本願義』に擧げられるすべての願名をみて、その感が深いのであつて、矢張り尊念の願名を姑らく繼承したものと考へられる。

扱ていま『三ヶ願事』に「本雜行廻心念佛」の願と言へば、植諸徳本の行は十九願に於ける修諸功德と同じく雜行である。而してそれは『具三心義』に

不_レ發_二眞實心_一之時、稱名念佛_{ハシ}屬_二虛假行_一攝_二雜毒善_一第二十願中聞我名字係念我國修行六念中念阿彌陀佛等是其證據也（上14）

と言つて念阿彌陀佛と共に雜行とせられるに一致する。而かも同じくそれは廻向せらるべきであるならば、二願に於ける對象としての機の差別に對する困難は茲に再び提供せられることゝなつた。

尤も『彌陀本願義』にありて

隆寛律師の本願觀（自見直）

聞名係念雖_レ似_レ稱_ニ法藏本意_ニ猶雜修諸行

と言へるに對し、十九願に於ける發菩提心は

雖_レ非_ニ本願意_ニ

と言ふから、後者が明確に非本願と決定せられるに對比すれば、そこに早くも二願領解の相違は出てゐるとも謂はれてよい。然し『彌陀本願義』二十願下に

此人信心不_ニ決定恐難_レ得_ニ往生_ニ乃至信心不_ニ一向_ニ廻_レ心發願一向專念無量壽佛願_ニ生_ニ極樂_ニ必令_レ得_ニ果遂_ニ也

と言へるを、十八願の機に對見すれば、十九、二十兩願共に廻心發願の機であると言ふのであらう。而してこゝに言ひ得られることは、十九願にありて「來迎」^①に捉はれることのなかつた如く、二十願にありて、「果遂」に捉はれることがなかつたことである。この點は鎮西が三生果遂ととり、西山が定散、念佛、來迎即ち十七、十八、十九の果遂せらるべき願と言ひ、長西系統が係念を觀佛とし、諸行本願とたてるに比考すれば甚だしく異つてをり、寧ろ今家の宗祖が「三願轉入」の告白のあとに「果遂之誓良有由哉」と言つてゐることに於て、その果遂と言へるが、ひとり二十の願功を讚へるに非ざる考方に似てをり、更に

信心移諸行不決定信心亂萬緣云々

と言へる、「信心」が本願眞實の信心として、而かも信心に住しつゝ尙諸行に止まることを示唆して、一向專念の機と本所修の善を執する十九願の機と簡異するのであるならば、宗祖が「眞門の機」といふに甚だ近い領解であると言つてよい。然し「信心移諸行」の文字は、訓點のないことと伴つて、その意味するところは明確でない。蓋し彼の正

雜二行の領解で言へば、「未發眞實心時自力行」は嫌はれるのであり、これは十九願にあて、考へたと見られる。即ち先に指摘せる如く、どこまでもそれが業力を執じて、「以本善力預來迎執」(上中生)「執小戒力以此業力望彌陀來迎乃至任本執證果云々」(中中生)等と言へるがそれであるが、いま二十願に於ては必ず他力に廻向された諸行とも考へられる。即ち、先に二十願を手本となすと言へる表現にあつて、一者に

聞彌陀名號心雖懸西方未發眞實心故自力稱名甚弱思植諸德本也乃至然此人忽以廻心歸彌陀發三心之時決定得往生也以此人隨本善爲往生修餘行言云々

と言ひ、二者として

執餘善自力業以此力欲得往生然而閑案因果之道理自力尙弱思以此等業廻向彌陀彌陀必納受我行業必垂來迎迎接非佛力難得往生思人是也

と言つて、明らかに廻心以前の本善を最後まで貫かうとしないのは正しく這般の消息と一致するところである。

更に言へば二十願に於ては本善と名付けらるべきものはないのであらう。何故ならば本善とは廻心以前の行業を名づけるのであつて、尠くも、廻心以後は本善と本質を異にすることとなるのであらう。こうした意味に於て、本善をもたない世善の機乃至下々品の機は二十願のもつ内容と相應しいと私は考へるのである。『三ヶ願事』に本雜行廻心念佛機と言ひて、十九願の本正道廻心念佛機と區別したのは興味がある。

かくて十九願二十願兩機の分齊も、多少明徴にせられたと言つてよいであらう。更にかうした領解の成立を次の如く論證することも許される。即ち十九願に修諸功德とあり、二十願が植諸德本であつたことに因るのでなく――

それは兩者が齊しく雜修諸行と言はれたところに見られるばかりでなく、

殖諸德本與修諸功德言異心同有^ニ何別^ニ乎

と言ふに答へて、

今見^ニ世間^ニ聞^ニ彌陀名字^ニ雖係^ニ心其國^ニ信心不^ニ一向^ニ修諸功德以求^ニ生^ニ極樂^ニ是善導和尚所^ニ立雜修雜行人也云々
とあるは、係心我國と言ひ二十願の機を擧げつゝ修諸功德と言ひ、竟に雜修雜行と言へるに見て明らかである——
十九願が至心發願であるに對し、二十願が至心廻向であることに着目したのであつたと言はねばならぬ。何故ならば、『三ヶ願事』に、長樂寺の二十願は「至心廻向句爲^ニ稱名念佛^ニ義云々」と指摘してゐる如く、隆寛は下輩の「以至誠心願生其國」を二十願成就の意と見、「發菩提心」の句を十九願の成就として、對見し、更に十八願成就は、已に至心廻向と言へる如く二十願成就を兼ねると言つてゐることが注意せられてよい。更に言へば聞名係念と言ふ、「聞名」に就いて見れば已に廻向を必要としないと言ふのであつて、茲に彼が「十九二十兩願其意惟異」と言へる結論を得たことに解せられる。

①「勅修御傳」卷十五に慈圓の編として九品來迎の詩歌をのせてゐるが、これを一例としても淨土教の「來迎」思想が當時の思潮一般へ大きな影響をもつたかを知らしめるのであつて、それはたゞに文學乃至藝術上に於てばかりでなく、信仰體驗として意味をもつたのであつた。

隆寛にあつても「來迎」は非常に重視せられるのであつて、

念佛行人所求者極樂也所期來迎也 (『淨土宗義』中13)

と言つてゐるのは、彼の持言とさへ思はれる。已に「源流章」が臨終見佛と語るのは來迎を意味してゐるに違ひない。

ともあれ、私のこゝに結論したいことは、彼にありて「聖衆ノ來迎ニアツカリテ觀音ノ蓮臺ニノボラムコトハ」云々（明義進行集所引）と言ふ如き、所謂命終時の聖衆來迎の思想がなかつたとは否定しないが、彼が來迎の文字を、本願乗託に、或ひは他力の象徴として使用したと言ふ考察が成立するてふことである。

問何以來迎引攝爲他力證據一手

答蒙彌陀來迎、乘觀音蓮臺、須臾超十萬億土、刹那到勝過三界之國、譬如劣夫從輪王行、風虛空而遊、四天下是豈非他力哉（具三心義）

とあるは、「觀音蓮臺に乗ずる」とことと「劣夫が輪王の行に従ふ」とは同一形容の表現として、他力を象徴してゐると見てよい。

更に又

廻向彌陀望來迎也今此來迎之心即三心中廻向發願心也

と言ひて、廻向發願心を根據として、「來迎を望むの心」と言つてゐるのは本願乗託の心とよりほか領解出來ない。又

尋常時乘本願見文決定可預來迎念佛故云々

とあるは、必ずしも臨終來迎とせず、平常本體乗託の所由として來迎なる表現に據つてゐると考へることは許されないであらうか。かくて、彼が「彌陀弘願來迎爲本」と言へるのは、臨終聖衆來迎の思想を擴充して、諸行の機より本願に乘託する意趣をもたしかめたものではなからうか。

八

元祖が第十八願に於て念佛往生を竿頭高く標幟したことは、門下諸哲をして十九、二十願の領解に腐せしめたことになつた。約言すれば諸行を如何に扱ふかの論である。従つてこれを門下分流の教義的原因の一とする見解の如きは、それが結果より見て妥當である。されば吾人は上來隆寛の十八願觀を十九、二十願の解釋と對見するこ

とに於て、闡明せしめんと努力した。惟ふに、宗祖の如く『觀經』に隱顯の解釋をあて所謂「三經差別」の見解を執るは別として、餘他の諸師が『大經』の三輩、『觀經』の九品を如何に會通するに腐心したかは、恐らく想像以上であつたであらう。隆寛が

本願^ハ以^レ他^ハ力^ハ善^ハ雖^ハ爲^ニ正定業^ハ傍^ニ捨^ニ自力^ハ善^ハ欲^ハ攝引^ハ故^ハ儲^ニ九品^ハ蓮臺^ハ儀^ハ也^ハ是故任^ニ本意^ハ之時餘善廻向^ハ言令^レ不^レ可^レ有^ニ其失^ハ也^ハ 『散善義問答』第四

と言ひて、九品來迎を十九、二十願に根據したとは言へ、本願に攝引したことは、而かも自力、他力の分別に最も力を盡くした彼をして「本願は自力の善をも捨てず」と言はしめたことは苦衷察するに足るものがある。彼の信仰にありては何等の矛盾のないことは解かるが、彼の教義として、即ち結局念佛の一類を成じようとする場合、相當の困難があつたと見てよいであらう。而かも敢て

自力^ハ行雖^ハ以^レ他^ハ善^ハ眞實^ハ心中廻入廻向^ハ以^ニ彌陀佛力^ハ故成^ニ往生業^ハ也^ハ九品^ハ往生人^ハ是^ニ其證^ハ也^ハ 『散善義問答』上品上生下
と言はしめたものは、一つには善導に依る十一門分科更に言へば第三、第四の料簡を以てする提撕に着目せるものであつた。即ち『散善義問答』に依れば

經品々中置^ニ第三四門^ハ事其品々中余善人發^ニ三心^ハ可^レ入^ニ念佛^ハ故也
と領解してゐることである。彼は更に『極樂淨土宗義』に

案^ニ觀經說^ハ就^ニ九品^ハ有^ニ三種^ハ一者三心具足人分^ニ九品^ハ是報土往生機也二者諸善修行人分^ニ九品^ハ是邊地往生機也
乃至

然第三第四門者即三心具足人也此兩門既互^ニ九品^ハ明知念佛行者有^ニ九品不同^ハ所謂諸行往生機中云々
と言つて、報、邊二土に約して九品の領解をなしてをり、その邊地と言へるが報中の邊地であるとする見解も、それ

が十九二十兩願酬報のものであり、九品に於ける廻善趣向の機に相應することを知れば、容易にその意のあるところを領知し得るわけである。多少叙述が混雜したが、彼が九品を領解して「三福九品」念佛九品^③の二類の看方（宗義中17）を出し、九品の本意は「念佛九品」に約することを「九品の廢立」に於て考へたことは、念佛一類を標舉する西山の正因正行の考方（散善義他筆鈔西全五²⁹³頁）と對見すれば、二類義を標舉せる隆寛にありて寧ろ徹底せる九品の領解が見られるとさへ思はれる。又西山が九品に善惡を分別し善の九品を十八願に、惡の九品を十九願に配屬せる（四十八願要釋鈔西全二²⁹³頁）とは同じ考方に出發せるものと思はれ仲々に興味の存することであるが、いまは兩者比較検討の餘裕を恵まれない。以上は隆寛の九品領解が善導十一門科の指南に據ることを叙べた。

更に彼の領解を成立せしめる一つは、上來論じ來つた三願交際の領解である。繰り返して言へば十八願が「三心具足專念佛の機」であるに對し、十九二十は、「雜行廻善趣向念佛の機」であつた。而かもひとしく雜行となしつゝ、十九願の機は「隨縁の果證」を求める人であり、二十願は「信心を諸行に移して信心決定せぬ」人であり、そこに三機を區別してをる。「願往生機其數雖多略而謂之不出三種故云々」と言ひて、三願を三機にうけるのが即ちこれであり、十九願の機に「一向專念無量壽佛以後與十八願不異也」と言ひ、二十願の機に「信心雖不三向廻心發願無量壽佛願生極樂必令得果遂」とあり、更に

凡三種往生願約機約行雖有不同正遂往生正蒙來迎之時皆是專念彌陀佛名人也（本願義97）と語り、『具三心義』上に

以三心具不具分雖爲二發三心後兩願體一也

と叙べるのは、三願を一機に攝する見解である。尙、覺終の『定善義問答私見聞』には

抑第十九願者此願機初發菩提心修諸功德人□□往生望後發三心乃至歸入他力後蒙來迎得往生也至心廻向後第十八願機同也云々乃至次二十願者初聞名號雖係心極樂未歸他力此人後至心廻向時三心具足歸他力與第十八機一同成得往生也（眞身觀の下）とあるのは、よくこの邊の消息を得てゐる。

斯くて、三機を一機に成ずるところに、彼の本願觀があつたのであり、更に三願を一機に基底するために、十九願の成就を三輩にみるばかりでなく、二十願の成就を「試案之三輩生中以三輩文可兼用之」といひ、或ひは「此下輩文自有三意一者有十九願成就意云々二有二十願成就意云々」といひて下輩とし、更に二十願の成就を見出願成就文中兼此願成就」とありて十八願成就に繋合し、こゝに二十願を楔とする十八、十九兩願との成就を見出さうとするのであつた。かく考察し來れば、彼がその本願釋にあつて諸行融會の意味に於て、如何に論理の統合に努力したかが如實に察知し得られるのである。

①「自力他力事」に據れば「念佛ノ行ニツキ自力他力トイフコトアリ」と出して、三業修善の念佛を力として、往生を願ふのは自力の行であることと「身ニモワロキコトヲバセシ、口ニモ……心ニモ……加樣ニツ、シミテ念佛スルモノハ、コノ念佛ノチカラニテ、ヨロヅノツミヲ、ノゾキウシナヒテ、極樂ヘカナラズマイルヅト、オモヒタル人ヲバ、自力ノ行トイフナリ」云々とのべ、更に「他力の念佛」を明して「ワガ身ノヲロカニ、ワロキニツケテモ、カ、ル身ニテタヤスクコノ娑婆世界ヲイカハハナルベキ、乃ゼカ、ルニツケテモ、ヒトエニ彌陀ノチカヒヲタノミアホギテ至サレバ、ツミノキユルコトモ南無阿彌陀佛ノ願力ナリ、メデタキクラキヲウルコトモ其餘行ヲマシエズシテ一向ニ念佛スルヲ、他力ノ行トハマフスナリ」云々と語つてゐる。尙、「後世物語」、「閑亭後世物語」にも見られるのであるが、要するに「非本願の行なるが故に自力」といへる如き、行體について先づ自力他力を辨別し、かくて機執に於てたがはざることを戒しめてゐるのである。而して「後世物語」に「師ノイハクマコトニシカルベシマツ一心一向ナルコレ至誠心ノ大意ナリワカ身ノ分ヲハカラヒテ自力ヲステ、他力ニツクコ、ロ

ノタ、ヒトスチナルヲ眞實心トイフナリ他力ヲタノマヌコ、ロヲ虚假ノコ、ロトイフナリツキニ他力ヲタノミタルコ、ロノ
 フカクナリテウタカヒナキヲ深心ノ大意トスイハユル……信心トイフナリツキニ本願他力ノ眞實ナルニイリヌル身ナレハ往
 生決定ナリトオモヒサタメテネカヒタルコ、ロヲ廻向發願心トイフナリ」とのべるのは、三心に約して自力他力を辨別して
 ゐる。換言すれば、行體の批判から機相へ移り、三心の具不具を以て自力、他力の批判根據とせるものである。彼が「具三心
 義」に「釋迦爲往生極樂機」説「三心具足之行」此行非募自力唯憑他力也と言ふのがそれである。この批判根據は又「當
 知難行難修難行難毒難善難緣虛假等皆是約自力行所立其名也」と言へる如く、そのまゝ二行の批判根據でもあり、又「聖
 道門者自發心自得果濁心不澄行業不成不能得道也淨土門者以信佛因緣乘彌陀願得生彼國唯是他力往生也入
 他力門之人何發自力門心哉」(具三心義)上といへる二門の領解へ標準を與へることゝなる。

然し「極樂淨土宗義」下の教相七番簡異の第七に「簡異自力爲他力」と標舉し、「眞實心中三業行故名爲他力行」と言
 ひ、善導のたてる自力眞實を他力、疑惑心中の自力之行は自力と並べ、從つて「歸他力」求「自力」者と「勵自力」求「自力」
 とを分別してゐる。今家の宗祖は自力眞實を自力として廢捨するのであるから、この點より言へば彼の自力、他力は不徹底
 と思はれぬでないが、その批判根據が三心の具、不具であつたことは、所歸の體と能機の相との融合を指摘して茲に彼の本
 願觀の徹底を示唆するものと見てよいであらう。

②第十八願の所詮は稱名行である。かくて稱名行は勝行の名を得てよく、その勝行所感の果としての極樂である(「極樂淨土宗
 義」と説いて、こゝに因願酬報の所以をのべ、蓮華藏世界と言ひ、或ひは「淨土論」二十九種莊嚴を以て象徵せしめてゐる。
 これに對して「大經」に於ける疑心願生者所住の宮殿と「觀經」九品行者所生の蓮胎とを「願力所成之邊地也」と言つてゐる。
 「極樂淨土宗義」下に「結國土相」二者報土二者邊地云々と云ふのは、前者と後者に相當する。尙その機に就いて報土生の
 人は因願十方衆生と觀經の具三心者であり、後者に疑心胎生の人と九品の行人を充てるのである。

以上は二土觀の概念であつて、早く「源流章」に、また隆寛の自著「自力他力事」にも二土の思想は窺はれるところであつ
 た。抑も二土の思想は異流にありて幸西と今家の宗祖といふ隆寛三師のみに見られるところであるから、鎮西の末疏「淨
 統略説」四流の偈頌に「無明斷除隆寛房諸行邊地名報」とあつて、隆寛の特色教義として注意せられて來たのは蓋し妥當で
 隆寛律師の本願觀(自見直)

ある。然し從來の資料では頗る不明瞭で、已に住田先生が「觀經九品を化土とせば、之を諸佛通相の應化とするか又報中の化とするか今章では不明なり云々」(源流章講義)と言はれてゐるほどである。然しこの點に關しては、已に「願力所成の邊地」と言ひ乃至約「行人情」似「有」其地「若約」能化主「全無」其他「云々」(宗義「下52」)とあるから、因願酬報の邊地とする意が明白にせられたわけで、今家の宗祖が十九、二十願に約して方便化土を施設し、眞身觀の佛と觀經の淨土をあてゝゐるのと一致する。されば幸西が像觀の佛を化身とし、化身を稱念して胎生の報をうけて化淨土へまゐる(源流章「所引」稱佛記)と語る報化二土の論とは徑庭を存する。尤も幸西の「玄義分抄」で見ると、大經觀經に報土、邊地をたて三輩と九品を充てゝなり、界内同居ノ化土ヲ假立シテ欣慕修行セシメテ積善增高ナラシメント欲ス斯乃報土眞門ノ調機ノ方便也と言ひ、「大品經」によつて新發意の衆生に約してゐるのは、「稱佛記」と異り、隆寛等の領解に近いものがあるやうである。尙隆寛には、

三福行者先生ニ邊地ニ後移ニ報土ニ豈非ニ淨土門正意ニ乎乃小乘行人置ニ中品ニ爲令轉ニ入報土ニ也 (極樂淨土宗義「下60」) と言ひ、又

三種衆生中有ニ二類ニ一具發三心與ニ本念佛人ニ不異此人列ニ上品上生邊地ニ即悟ニ無生ニ須叟移ニ報土ニ也乃至
第二此人以ニ本善力ニ爲レ功望ニ來迎ニ彌陀佛爲レ攝ニ此機ニ所儲之土故垂ニ來迎ニ也於此所一見佛聞法初得ニ無生忍ニ移ニ報土ニ也 (散善義問答)

と語るところの轉入報土の義がある。即ち善導の提撕による十一門分科に據る「九品廢立」の思想がこれであるが、是等重要なる問題を多含する彼の佛土論は又改めて檢討の要がある。いまは二土の概念一般のべたまでである。

③「指三福九品」名爲「教門」者釋迦觀機施設九品之故也と言へる如く、よく教門の語を出してゐるのは、三福九品に約する領解である。勿論それが釋迦の衆生に對する觀機に基調することと言ふのである。隆寛が觀機を語るは當時に於ても注目せられたであらうことは、金澤文庫藏の「玄義分聽聞抄」に

三輩九品散善也如何觀云乎 答多流義不同也長樂寺 佛觀機觀也 故疏 韋提請說定善觀ニ未來機說三福九品取

也、云々

とあるに仍て想察せられる。

九

隆寛教學の研究は近時それが資料の完備と相俟つて、從來『源流章』を中心とする考察、即ち(一)多念往生、臨終見佛斷惑得生(二)二行報化の對判(三)彌陀光明攝不の如き限られた領域から脱していろんな方面から、従つて可成り深く爲されることになつたのは洵に欣しいことである。私の論述も更にさうした從來の見解を再検討することに進まねばならぬが、それは他日を期せねばならない。而して上來考察する本願と三心の問題の如き、蓋し彼の教學に於ける根幹たるべきものであるから論じて際限のないものがある。然し私は一往こゝに小結を出しておきたいと思ふ。

隆寛は四十八願を十八願に統攝し、因願に報いる果上の佛土に注意して、而かも名號正定業の微意を存した。次に三心に就いても、それが『觀經』の三心に約して舒べられてはゐるが、よく「至心」のこゝろを極めたと言つてよい。更に「乃至」に着目し、それが稱名の遍數に拘はるまじきことを、願成就に於て注意した。又三願を特に注意し三機を出した。然し十九、二十は結局諸行の機であるから、十八の念佛往生と相對して、二類往生を成立せしめた。而かもその意のあるところは、十九、二十の機も本願一類の機に被らしめることであつた。

かく論じ來れば、今家の宗祖が立場と甚だ緊密なる關係にあると言はねばならぬ。由來宗祖の本願觀は『尊號眞像銘文』(本三一右)に依れば『唯信鈔』の指南に負ふところ多いことを語つてゐるが、上來考察するところと『唯信鈔』の三信十念の説とを望めても、寧ろ隆寛の領解に一脈の關聯あるやを想はせるに切なるものがある。

因みに信瑞が『明義進行集』に先師隆寛を語る中に「抑當世淨土ノ法ヲ談シ、念佛ノ行ヲタツルモノ、大半ハコレ律師ノ遺流ナリ」(註頁)と言へる如く、その教勢は頗るさかんであつたと推考されるのに、彼の門下血脈が、色々の推考よりして、元亨年間(一九八一—一九八三)位に絶えてゐる。即ち隆寛の正系と思はれる鎌倉長樂寺智慶の流がそうであるから、早く諸行本願を唱へた京都長樂寺敬日一派の如きは五代を以て、智慶流より早く血脈を失つてゐることが推考される。これ等の考察は當時の文化史の背景を知らねばならず、茲に論及し得ないが、教義的に言つて、上來考察した本願觀に緣由するところの多いことも考へられる。即ち十九、二十願の餘行雜行を、「彌陀に歸向する」と言ひ、本願三信に融會せしめたこと、又九品に於て「念佛九品」「三福九品」の廢立を爲しつゝ、三福行者の得生を許したことは、諸行本願となる嫌ひがあつた。例へば信瑞が

「九品を経て菩提心の有無を論ずることは、諸行往生を許す教門の一筋也」(廣疑瑞決集註頁)

と言つてゐる如き、また淨遍僧都の『別異弘願性戒鈔』で見られ極端なる多念策修の如きも指摘せられる。而かも當時代は「諸行本願義」の全盛の期であることも考へ併せるならば、隆寛の門下が諸行本願を稱へるに至つたといはれることは、無理のない傾向と肯定せられてよいかも知れない。已に諸行本願を語れば純正淨土教と遠い。かくて長西一派が頗る早く減じたのと同筆法であつたであらうが、寔に隆寛のために惜みても餘りあると言はねばならない。



上來考覈するところが聊かでも彼の正しき領解に近いものであれば私の幸とするところである。委曲は他日を期し、尙本稿に誤れるものあらば是正するであらう。すなはち切に先達諸賢の示教を冀ふ所以である。